

共産主義者同盟結成大会議案

全国の青年同志諸君!!

我々はすぐる一年もブルジョア階級とのきびしい闘争にあけくれた。しかしプロレタリア大衆の偉大な戦闘意欲にもかかわらず、また資本主義の死の苦悶にもかかわらず、世界革命への道程は峻しく、またきびしい。何故なら真に革命的な指導部がどこにも存在しないからだ。

我々は約半年間の困難な準備を経た後、新しい革命的政党の結成を、真の同志的結合を求めて全国から集った。我々の多くは、学生運動の実践の焔の中で、ブルジョア階級に対する激しい憎悪と、プロレタリア階級に対する限りない信頼とを植えつけられた革命的インテリゲンチヤを代表する。改良主義者と代々木官僚の卑劣な裏切りにもかかわらず日夜苦難に満ちた闘いをつづけている若き革命的プロレタリアートと我々の結合はようやく始ったばかりでまだ弱く十分でない。

しかし我々は搾取、貧困、抑圧、服従の絶滅と人間の真の解放を意味する世界共産主義革命の戦略を放棄し、もはや背教者としての烙印をおされるべき「公認」の共産主義運動の指導者と自らをはっきりと区別し、大衆的な革命党の結成とプロレタリア独裁の実現という偉大な事業を、死を賭してもやり抜く覚悟と熱情を有している。我々の周りにはきびしい官憲の監視の眼がはられている。「公認」の共産主義運動の指導部からはトロツキスト、「支配階級の手先」、挑発者とのバトウが浴びせかけられている。しかし我々は一切の流れ

に抗してマルクス・レーニン主義の革命的伝統を忠実に守り、その旗印をたかくかかげて進むであろう。

全国の青年同志諸君!!

我々の意図と思想と熱情は次の文書の中に未熟な言葉でつづられている。我々と思想を同じくし、ブルジョアジーと、彼等に死を与えるべき革命運動を毒しつづけている者達に対する、火のような憎悪に燃える同志諸君に我々は熱情をもって訴える。日本労働者階級解放の革命的前進のために我々と共に進もうではないか。

万国のプロレタリアート団結せよ!!

一九五八年二月

東京

(一) 共産主義運動は未だ勝利していない

「社会主義」の「世界的体制」としての確立が、宣言されている。「共産主義は世界的にのみ存在しうる」(マルクス)という命題は、もはや古くさくなつたとされ、ソヴェイト・ロシアの国境の中では、何時になつても死滅しない官僚の手によつて「共産主義の移行」を目ざす七カ年計画が作製されている。世界革命は「社会主義への××の道」というコトバが示すように、それぞれの国の民族的自主性のうちに分散せられる事となつた。しかし実際には、「社会主義の実現」は不確定の未来においやられ、未解放のプロレタリアートはブルジョアの発展の黎明期には生産力の力強い刺激を与えた

「季節」特別増刊号(一九七九年)

が、今ではもうその歌は歌いおわってむしろ柀柀に転化した。「祖国」を擁護する為、自国のブルジョアをアメリカ・ブルジョアから切り離し、中立化させたり、「産業ブルジョア」も含めた平和愛好諸国民に平和の呼びかけを行ったりする闘いを強制させられている。

社会主義は今や勝利したという。しかしそれは真実を語っているであろうか。自分の商品の販路を常にますます拡大しようという欲望にかられたブルジョア階級によって、あらゆる国々の生産と消費とは世界主義的なものに作りあげられた。生産力は国境をこえて拡大し、その結果は鉄の如き必然性によって帝国主義列強の横奪と彼ら同士の間で衝突とであった。そして完全な奴隷化、途方もない抑圧、貧窮、世界的飢饉のみがプロレタリアートに対して与えられた最後の報酬であった。資本主義の最後の死滅しつつある段階、帝国主義の混頓を克服し得るのは唯プロレタリアートのみである。プロレタリアートは眞の秩序である共産主義の秩序を作りださざるを得ない。資本の支配をおわらせ、戦争を不可能ならしめ、国境を廃絶し、全世界を一つの自分自身の労働の為に労働する共同体に転化し、諸民族の解放を実現せざるを得ない。

人類はまだ二つの階級に分裂させられている。たしかにソヴェト・ロシアと中国を中心としたユーラシア大陸の大部分ではブルジョア階級は打倒された。しかし「地方的」な共産主義は可能であろうか？ 全くのナンセンスである。地球上の大部分ではまだ資本の専制に呻吟し、戦争の恐怖におびえる人々が残存しているのだ。そして四十年にも亘って世界経済との不可避的な連関から切り離された国境内での自足的な経済建設の強制は、共産主義の実践を長きにわたって毒しつづけて来た裏切りと背教の社会的基礎を提供する。

展している諸国との競争だけでも、産業の発展がおくれている国においてこれに似た矛盾を生みだすに十分である。(マルクス)アラブにおける国家の合併は政治的にはブルジョア階級の民族国家形成の運動を意味する。そのために彼らは世界的には両階級(というよりは両「体制」)の均衡という事実のうえに依拠し、帝国主義的搾取の重荷にたえられなくなった民衆を政治的に動員しながら帝国主義者から重要な譲歩をかちとるといふナセル・ポナルチストの下で自らの搾取の条件を拡大している。イラクでもそうだ。王朝の権力のもとで政治的に覚醒して来た「過小農民」や小ブルジョアの目をこまかし、また世界的な資本の競争に順応する為にもっと強力に「上から」の改革が促進されたにすぎないのだ(日本の農地改革を見よ)。カセムは運動の民衆的展開力を極度に抑制する事によってその目的を達しようとしている。だからアラブにおいてときはなたれつつある民衆のエネルギーは、もし彼らが民族ブルジョア階級に対する誤った幻想を捨てて、反帝国主義の闘争の旗をしつかりと自らの掌中に握りしめた時に、はじめて進歩的な意味を持ちうる。それ故に帝国主義者は自らの姿に似て成長しつつあるナセルやカセムに対する若干の譲歩にちゅうよしないが、もしその激動が平民的性格を帯びるようになると、無恥にも干渉にのりだす。だからアラブの国民はその他のブルジョア諸国民とならんでアラブの国の壁の中で革命をとことんまで遂行しようと考える事は出来ぬ。もしそうならば、ブルジョアの「祖国」を形成するだけでそのエネルギーは早晩たやされ、今迄よりも数倍に加重された矛盾に苦しめばならないであろう。彼らはブルジョア社会の心臓部に向ってその暴力的爆発をはねかえす事なしにどうして自らを解放しうるだろうか？

今日核兵器戦争の恐怖が語られている。それは資本主義の腐朽性を物語る以外の何物でもない。もしプロレタリアートがただちに史上最後の支配者となったブルジョア階級の打倒に成功しない限り、階級闘争は両階級の共倒れにおわるという悲惨な事態をもたらすかも知れない。そのような結果は、「両体制」の平和的共存によつては、つまりブルジョア階級の存在に手をふれずにおく事によつては、避ける事は出来ない。

各国の労働者の共同努力によつて帝国主義者に死を与えよ！
「彼らは全世界をかくとくせねばならない」全世界プロレタリアートの終局的勝利は解放された人間の眞実の歴史の開始を意味する。

(二) われわれのおかれている国際的な状況

アラブ革命の行方は今日国際革命運動の帰すを決する最も鋭い焦点の一つを形成している。何故、今日アラブにおいてまれに民衆のエネルギーが解放されたかあるのだろうか。それは資本主義的発展が未成熟で、競争戦に何らの特権を与えられていず、それ故に最も鋭い矛盾の集積にのしかかっているというアラブの世界市場における地位によつてのみ説明される。アラブの激動は資本主義的な世界市場の法則性にその根柢をもっている。国境の壁の中では、資本関係が未成熟であることによつて、それがなにか「国民的」な課題であるかのようにいうのは、全くの非マルクス主義を意味する。「ともかくもこの矛盾(生産力と交通形態のあいだの矛盾)がある一国内において衝突にいたるためにはその国自身の中において極端にまでおしすすめられていなければならぬというわけではない。拡張された国際的交通によつてひきおこされた産業的によりいっそう発

アラブ革命と帝国主義本國のプロレタリア革命の合体とは、アルジェリア革命戦争によつて実証されつつある。廻りだした恐ろしく巨大なアルジェリア革命戦争の車をおしとどめようとするフランス・ブルジョア階級の力に余る精力の消耗こそが、フランスの政治的危機の眞の根源を説明する。フランス・ブルジョア階級は世界市場における自己の立ち遅れをサハラ資源の確保によつて取り戻そうとする。だからいちじるしくプロレタリア人民の性格を帯びて発展しているアルジェリアの独立戦争に譲歩することは出来ぬ。勿論彼らは何十万という軍隊と共に策略をも必要としているけれども、フランスの大ブルジョアは当面ポナルチスト型政權に自らの支配の道具を見出した。アルジェリア革命のもたらす危機の爆発如何によつては更にプロレタリアの一切の民主主義的組織を野蛮に殲滅しつつすファシストが頭をもたげるであろう。フランス・プロレタリアートはアルジェリア戦争の階級の性格をはっきりとらえ「革命的敗北主義」のレーニンの旗印のもとに結果し、もはやブルジョア支配の藩屏の役割としてしかの意味しか持ちえない事が誰の目にもあきらかになつた議会に見切りをつけ、プロレタリアートの革命的努力をただちに開始せねばならぬのであり、このようなフランス・ブルジョア階級の死の苦悶は彼らにとつてのみ存在することではない。過去数年間続いたブームに狂喜した全世界のブルジョアは、今や世界史上最大の深さをもつて進展するであろう大恐慌の切迫におびえている。ブルジョアの攻撃の手段が国家による最も巨大な収奪の制度にまで発展せられた事は、それだけにブルジョアの再生産過程のもつ極限をとことん迄おしすすめる事によつてより深い矛盾の激発を用意しているのだ。国家的諸操作によつて若干の上昇をみせている景気循環には早晩もつとおそろしい事態がまちかまえてい

あろう。万事、事が順調に運んだ時期のブルジョアジーの実践的友愛に代って、今や力と狡智の死闘が始まっている。その死闘に耐えぬく為には帝國主義諸国家間の対立はようやく顕在化し、彼らの再編成が始まっている。アメリカはもつと横暴に振舞うであろうし、それはまた自立を強めている日本、ドイツとの間に鋭い帝國主義的対立をひきおこさざるを得ないのである。ドゴールによって「偉大さ」を夢見るフランスは、ファンズムによってもつと狂暴な勢力として登場するかも知れぬ。彼らはプロレタリアートの脅威の前に不可避的な経済的利害を調整して政治的に結束をかためようとしているが、誰がその主人公となるかは政治家の間では決せられぬ。資本の力が最後を決定する。それ故に彼らは一切の矛盾をプロレタリアートにおしかぶせながら合理化を進め、植民地を独占し、市場を独占しようとする。数百万の労働者が工場から追われ街頭にはおりだされつつある。再び恐慌、革命、戦争といった激動の周期がおとずれようとしている。しかしそれは唯プロレタリアートが正しい指導部を有した時のみ、新たな時代を切り開くのに利用する事が出来る。もしそれに失敗するならば、再び動揺したブルジョアは強化され、長期に互る暗黒を意味するであろう。この恐慌を人民的に克服して民主主義的な秩序を世界に回復しようなどというのは全くの反動的なユートピアにすぎぬ。「両体制」の共存の基礎をうちかためる等というのは、日々帝國主義の重圧の下に苦しむ人民を慮らうする以外の何者でもない。帝國主義体制は崩壊しかけています。

世界的強盗、プロレタリアートの殺り手者の陰謀を粉碎せよ！
プロレタリア・ソヴェートの國際共和国万歳！

それ故に彼らは「他の国々の被搾取階級を自分の側にひきつけ、資本家に対する蜂起をおこさせる」というのではなく、「それぞれの国の事はその国民が決めればよい。だから諸君はソヴェート・ロシアに干渉しないで呉れ」（ブルシチョフ）と「民族共産主義」の本質をあきらかにする。そして世界経済との関連を國際的な共産主義的統制の実施によって回復しようとするのではなく、世界革命の遅延という客観的事実を容認しながらブルジョアジーとの貿易によってそれを回復するとの政策を追求している。しかし、資本主義に包圍された国における自足的な経済建設は、生存の危機におびえ失われた地上の奪還をめざすために狂暴になったブルジョアジーの侵略の危険にたえずおびやかされている。それ故にアメリカを盟主とする國際ブルジョアジーの政治的結束を乱し、彼らを中立化させるという事が外交政策の礎石としておかれている。偉大な十月社会主義革命のとき、第二回ソヴェート大会はこれと全くちがって次のように結ばれたレーニンの「平和に関する報告」に「しずまることのない拍手」を送ったのであった。「ただちに休戦協定をむすぶ事を提議するにあたって我々はプロレタリア運動の発展に多くを寄与した国々の自覚した労働者たちに呼びかける」ブルシチョフはアメリカブルジョアジーとの均衡を保つために行なうアジア・アラブ民族ブルジョアジーとの取引さえも「平和勢力の増大」というテーゼによって合理化しようとしている。

國內政策においても彼は國有經濟の労働者の性格を一層強化する方向ではなく、「管理機構改革」M.T.C.のホルズへの売り渡し等の便宜的手段によって当面の矛盾を糊塗しながら、価値法則の一層の貫徹と物による人間の支配の強化を許している。そして地球の一大部分で人類が貧困と抑圧に苦しんでいる時に、彼らは一九五

(三) 破産した「公認」の共産主義運動の指導部

今日のプロレタリアートの運動は「これまでの一切の社会秩序を強力的に転覆することによってのみ自己の目的が達成される事を公然と宣言する」(マルクス)共産主義者によって導かれているであろうか？

ソヴェート・ロシアや中国のプロレタリアートの指導部は、「他の資本主義国にたいし、たちあがり、他の国々の被抑圧階級を自分のほうに引きつけそれらの国内で資本家にたいする蜂起をおこし、必要な場合には、武力に訴えても搾取階級とその国家に反対して行動する」(レーニン)姿勢をとっているであろうか？そして「階級のない社会主義をうちたてずには戦争をなくすことはできない」とのレーニンの旗印は高く掲げられているであろうか？これに對して共産党公認のイデオログは口をそろえてこう言いたてる。それはもう古くさくなった。今日では戦争は不可避ではなくなくなった。資本主義と「社会主義」は平和的に競争する事によってその優劣は決せられるのだと。

今日、公認の國際共産主義運動の中には幾つかの流れが存在する。しかし、彼らは平和共存の戦略コースに基づいて帝國主義戦争が勃発する根源を除去する為には闘うのではなく、その一時的阻止を自己目的化し、全世界的規模での共産主義の建設という戦略課題から一國の課題を抽象化、絶対化するという点において本質は全く同一である。その統一した綱領は「十二カ國宣言」と「平和宣言」である。ソヴェート・ロシア共産党は、一國社会主義建設の絶対化において最も徹底した立場をとっている。

九年一月の二十一回大会に向けてロシアの国境の壁の中の共産主義の建設という「郷土的迷信的」(マルクス)なプランの作製に没頭している。

中国共産党は反帝國主義の旗印をソヴェート・ロシアの同僚よりも鮮明にかかげているかのようにみえる。彼らは第二次大戦後の革命的高揚の中でスターリンの「国民党との統一戦線」の勧告をしりぞけて帝國主義者、地主、ブルジョアジーの権力の打倒に成功した。しかし、中国は生産物の国家による直接的管理と直接的分配を可能にするだけの巨大な生産力の前提を有しない。所有をもたない大衆ブルジョアジーの前提も不十分である。「帝國主義は張子の虎」といった現象論や、大衆路線という経験主義的な非プロレタリア的思想を可能にする。そしてその反帝國主義の姿勢も「外因」と「内因」という毛沢東の「弁証法」に媒介されており、國際的な階級闘争の課題としてではなく「中国が平和的環境において社会主義を建設しよう」(陳毅)ために必要とされるのである。

生産組織と行政組織の合一、生産者による生産の意識的支配の側面へのみ眼をうばわれて、人民公社の運動が成功裡に共産主義の建設を用意するかのようを考えるのは全くのナンセンスである。「個性の十分な発展が要求する消費範囲」(マルクス)をたえず拡大する巨大な生産力の発展が中国の自足的な建設にのみ賭けられるとするならば、それは「百年河清をまつに等しい」。

レーニンがかつてドイツプロレタリアートがロシアのおよび世界のプロレタリア革命のもつとも忠実な、もつとも信頼出来る同盟軍であると期待したように、我々は中国労働者との不倶戴天の敵、日本帝國主義者を打倒して共産主義建設という共同の事業に馳せ参らなければならぬ。

ユー・ゴスラヴィアの共産主義者はクレムリンや北京の指導者によって修正主義者としてののしられていた。その修正主義批判はロシア・中国の指導者にとっては、大衆の官僚主義的圧力に対する抵抗の障壁としての役割を担っているに違いない。そしてカルデリは今日まれにみる革命的パトスをもって共産主義における国家の死滅を語り、ソヴェートの官僚主義的歪曲に対して激しく弾劾する。しかし国際的視野において共産主義の建設の全容を照しだすのではなく、「官僚主義反対」のスローガンのもとにプロレタリアートの意識的指導性を放棄して生産と管理を地方的に分離する試みは、生産の無政府性の物神崇拜的関係を不可避的に生みだしている。

彼らはその官僚主義批判において一定の存在意義を有しながらも、世界革命戦略の放棄によってその本質は「スターリン主義者」と全く同根である。

世界最大の力を誇っていたフランス、イタリア共産党の政治的破産は今日では全くあきらかである。彼らは死の苦悶にあえぐブルジョアジーに死を与えるべくプロレタリア大衆を革命的行動に動員する能力を全く失っている。

トリアッティは社会主義への議会の道、国家独占資本主義の役割、社会民主主義者の性格と役割等について公然とレーニンを修正してレーニンが第二インターと闘ったまさにその点についての社会民主主義への転向を証明した。彼らの修正主義的改良主義的理論は全くの「ベルンシュタイン」の再版にすぎない。

「トリアッティ・ガロディ論争」に見られるようにフランス共産主義者はこのような「イタリアの同志の原則からの逸脱」という。しかし実際には彼らも「民族的威信」というスローガンによって排外主義におち入り、社会主義の綱領を不確定の未来におしやっている。

またその歴史は帝国主義者との闘争によって流されたというべき革命的な多くの血によって綴られている。だがその故に今日公認の共産党のおちいっている危機的状態は国際的な階級闘争における致命的なことなのだ。

今こそプロレタリアートの革命的力量を汲みあげて階級闘争を指導する事の出来る現実的な能力を備えた前衛部隊を組織せねばならない。

(四) 「背教者」の社会的支柱

すでにその破産の証明された共産党を「一枚岩の団結」という神話によって規制された「正常」な党内闘争によって革命的に再生する事は可能であろうか？ 彼らの裏切りの根源は単なる政治的、理論的無能力さに帰せられるのであろうか。

すでに検討したように国際共産主義運動の内部にはいくつかの政治的潮流が存在するにもかかわらず、今日すべての共産主義党は平和共存と一国革命の絶対化、世界革命の放棄においてその本質は同一である。国際共産主義運動を長い期間に亘って毒しつづけて来たスターリン崇拜はもはや維持しきれなくなった事が二十回大会で証明された。それはドグマとおおるべき官僚的支配にまさに死滅しかけていた国際共産主義運動に再生の機会を与えるかのように思われたが、しかし革命的プロレタリアートの真の指導部を渴望する期待は日々裏切られつつある。

今日世界革命の戦略を放棄し「平和宣言」を金科玉条といたたく「背教者」の一群の世界的存在をもって、我々は一つのインターナショナルの存在とその崩壊を語り得るであろう。

「西ヨーロッパ諸国では民族運動は遠い過去のものになっている。イギリス、フランス、ドイツなどでは『祖国』は歌を歌いおわりその歴史的な役割をおわった……これらの国で日程にのぼっているのは命数のつきた資本主義的に爛熟した『祖国』から社会主義にうつる事である」(レーニン) 彼らはアルジェリア戦争によってもたらされた政治的危機に頑固に眼をつぶり、プロレタリアートの革命的行動を燃えあがらせるのではなく「アルジェリアに平和を」「共和憲法による永遠的結合」の空文句をくりかえして、破滅しかかっている「共和制擁護」のスローガンに固執している。そしてまた革命的前衛の独立性を絶対に保持しながらまだその指導下に来ていないが故に信頼をしないプロレタリア大衆をもブルジョアジーに對する共同の行動に引き入れるために大衆に對して一定の影響を保持している改良主義者との調整を是認するためにされた統一戦線の戦術を社会民主主義との協調論の統一戦線にすりかえ、モレの提出した、すぐれて帝国主義的な「特別権限法」に賛成投票を投じ社共の統一行動実現に快哉を叫んだのであった。彼らは反ドゴール・反ファッショの闘争においてもプロレタリアの革命的努力に信頼をおかず、救いがたい議会的クレチン病におちいっている。彼らは本国のプロレタリアートの支援から切り落されたFLENの行動を票が減るが故に「是認出来ない」と通告する。そして今では国民議会の選挙の敗北を社民の裏切りに帰して下部黨員には「諸君の反共政党を拒否せよ」との最後通牒をつきつける。しかし第二インターがまさに裏切りものに転化した故に、第三インターナショナルは結成されたのだという事を彼らは忘れていたのだ。

今日共産党は十月革命の精神に鼓舞された真のポリシェヴィキ的分子をその構成要素にもち、最も戦闘的な部分に自らの基礎をおい

かつてレーニンは帝国主義戦争の過程で社会排外主義に転落した第二インターナショナルの英雄を弾劾しながら、社会排外主義は日和見主義のもっとも爛熟したもっとも完成された形態である事をあきらかにした。こういう潮流が生まれたのは、ほとんどの先進諸国が植民地民族や弱小民族を略奪することによってブルジョアジーの超過利潤の一部分でプロレタリアートの上層を買収する事を可能にしてきたことによるものである。彼らは直接の階級であるから彼らとの統一は労働者が「自国」のブルジョアジーと同盟する事である革命的労働者を分裂させる事である。

このような社会的根源からの究明のみが真に団結しうるプロレタリアートの受け入れることの出来るものとなる。

「我々は常に国際革命のために働いている」と語るのを忘れなかつたレーニンの公式の後継者を任じながら「二つの宣言」のもとに結集した今日の共産党指導者の破産の社会的根源は何か？

レーニンはロシアにおける資本主義の発達の主體的客観的状況を分析して、プロレタリアートにただちには社会主義革命を課題とはせずして、労農民主独裁の仮説を提起したのであった。しかしレーニンはこの仮説が後に理解されたように固定的な段階としてではなく、プロレタリアートにとっては「一時的な経過的」なものにすぎないものとして提起したのであった。しかし第一次帝国主義戦争が客観的に避けがたいものとして最初の革命をロシアにおいて切っておとすであろうという展望、しかもそれはすぐれてプロレタリア的内容を持たざるを得ないであろうという展望とロシアは社会主義を組織するのに十分な生産力を有していないとの現実の間によこたわる矛盾を国際プロレタリアートとの同盟、つまり「ロシア革命がヨーロッパ社会主義革命の序曲であるばかりではなく切り離す事の

出来ない構成部分」となるであろうという見通しによって解決した。二月革命と十月革命は「民主主義的要求は最早プロレタリア革命を通じるより他にはどれ一つとしていくぶんでも広範にまた強固に実現出来るものではない」ことを証明したのであった。国際的な階級闘争はロシアにおいて中間的な民主主義的な政府の存在を否認し、その階級的立場の貫徹を要求したのであった。しかし小農経済の圧倒的なロシアにおける鎖国的な自足的な社会主義の組織は「全くの反動的ユートピア」であつたらう。レーニンは当面飢餓について語りながら「我々のふりかかっている困難は国際的不幸である」とモスクワの労働者に国際主義的な思想を伝えた。しかしドイツ革命の敗北による「一國革命の強制は結局直接社会主義の組織によってではなく「小農経済から国家資本主義を通じて社会主義へ」との迂回コースを必要としたのであった。それは出来高払い賃金制、商業取引の導入等価値法則への妥協を意味した。しかし、レーニンはそれが「社会主義の原則からの後退であり我々は公然とこれを労働者につげねばならぬ」と語るのを忘れなかった。

こうして「官僚主義は『包圍』の結果として小生産者のバラバラに分散された状態に対する上部構造としてその姿を完全にあらわした」(レーニン)その官僚主義の歪曲を是正するためにレーニンは労働監督官の改組、労働者のストライキ闘争の是認、スターリンへの勧告等の幾つかの手段を講じたのであった。

しかしレーニンの死後、資本主義の包圍と世界経済の断絶によって余儀なくされていたロシアの閉鎖的な自足的な経済建設はそのような傾向の速やかな是正を許さなかった。スターリンによって「平等主義は小ブルジョアイデオロギー」だと直言され価値法則の導入による「原則」からの後退は「原則」にまで高められた。「労働

めていった。中でも五七年の春闘、新潟国鉄労働者の偉大な実力行動は労働者階級の自信と闘争意欲の爆発の頂点をなしていた。しかし国際収支の悪化という形でようやく激化の一途をたどる市場争奪戦を一層の合理化の強行によって闘いぬこうとするブルジョアジーの決意と、自らが設けた枠をのりこえつつ進む労働者大衆の闘争に驚愕した改良主義者の抑制は、常に労働者の行動を挫折させ、踏みとどまらせてきた。藤林幹旋案の受諾、鉄鋼労働者の敗北と労働者階級の後退と敗北がつづいた。改良主義者の闘いの抑制にもかかわらず、激しい階級的憎悪を持ちながら苦難にみちた闘いを粘り強くおしすすめようとする下部労働者は、明確な革命的方針を渴望しながらそれをどこからも与えられなかった。ブルジョアジーは「別個に進ませ、別個に打つ」を合言葉に労働者の要求を一切拒絶し、官憲の暴力、マスコミ、ニケーションのあらゆる手段を通じてながら攻勢につぐ攻勢を加えて来た。彼らは一方では労働組合内部の右翼的日和見主義の潮流の育成に力を傾注して来た。五八年九月の勤評闘争はこのような動向の頂点をなしていた。敵が全力をあげて加えて来た攻撃に対して、改良主義者達はそれをプロレタリアートの統一した階級的実力行動によって反撃する事をサボリ、闘いをくり広げている教育労働者を孤立したまま放置し、闘いの終熄を自ら公言してはばからなかった。「敵の全面攻撃に対して反撃を、全面的反撃から攻撃へ」の左翼のスローガンはまだ労働者の多数をとらえて行く事は出来なかった。ブルジョアジーとプロレタリアートの間に位置し、政治的激動の中で動揺する広範な小ブルはブルジョアの側にひきよせられた。

しかし、ブルジョアジーは、一方では深まり行く恐慌のきざしにおびえはじめていた。しかしこの危機さえも彼らは訪れようとして

の質」に依じた分配による価値法則の適用は是認され、物神崇拜的関係は復活した。所有者の利益を外に向つても内に向つても守るために作られた組織に代ってプロレタリアートの自発性、創意性を最大限に發揮するために作られた大衆組織ソヴェートは変形し、プロレタリアートの剰余価値の報酬をうける官僚層はますます社会から独立して行った。このような「価値法則」は物神崇拜的関係にもとづく特権的官僚層の存在、自己の利益と特権を守ろうとする彼らの保守意識こそが一國革命の絶対化を導いたのであった。

以上が今日の日和見主義の社会的根源を説明する。それ故に彼らは世界革命によるプロレタリアートの真の解放を擁護したり、国家の死滅を語る事によって官僚の特権を脅かすものに対して、トロツキスト、修正主義の罵倒を加え、国際革命運動を救いがたい日和見主義で毒しつづけているのである。

それ故に我々はおかかるところから自らをはっきりと区別し、その独立性を保持しないならば、世界革命は不確定の未来においやられる結果を招くであろう。

(五) 日本プロレタリアートの闘争

警職法闘争は日本プロレタリアートがブルジョアジーの政治攻勢を自らの実力行動によって粉碎するという経験をはじめて持ったという点においてのみではなく、さまざまな教訓と意義を我々に残している。

過去数年間、新しい注文、生産拡張の為の企業の再組織、就業労働者の数の不断的増大等の景気循環の上昇傾向の中で、プロレタリアートは自己の抵抗の要求を増大させながら自信にみちた闘いを進んでいる。世界的な市場争奪戦の中で、強固な帝国主義的地位を確保するためにより攻勢的姿勢によって国内の支配体制を一举に強固に確立するべく労働者階級におそいかろうとの決意をかためる契機を与えた。日教組に対する攻撃が成功したと見た彼らは、次は全通と炭労の闘いが中軸となって不況のしわよせのもとで激発するであろう労働運動が、一大潮流を形成して対資本家階級の階級闘争に発展する前に先手をうって一大政治攻撃を開始したのであった。

警職法提出——彼らはときたまされたブルジョア独裁の牙をむき出しにしながらプロレタリアートにおそいかかってきた。このような事態の中で日本のプロレタリアートは自らの闘いの武器——民主的諸権利の根こそぎの攻撃の意味を殆ど直感的にうけとめてたちあがった。議会主義の枠にたえず労働者をひきずりこもうとする改良主義者の後退と動揺、裏切り、「警職法反対のみに闘争を限定しようとする一部のセクト的動きがある」との代々木官僚のおどろくべき無能にもかかわらず、十一月五日の実力行動は労働者階級の偉大な階級的力量を發揮して闘われた。小ブル層は露骨なブルジョア独裁の前に自らの政治的権利の侵害をおそれ、プロレタリアートの行動にはげまされながら行動にたちあがった。ブルジョアジーは岸の政治的地位の動揺が政府危機に到り政治的危機にまで発展しかねない状況の中でついに強行方針をすてた。九月の終りから十月当初の自信にみちた支配者のプランは完膚なきまで狂い、その政治委員会には動揺し、自信を喪失した。「全面的反撃から攻撃へ」の左翼のスローガンは実感をもち語られる事ができた。しかし、大衆の行動力がまさに議会主義の枠をのりこえて前進しようとした瞬間に闘いはおしとどめられ、ひきとどめられた。労働者には追求の方向が与えられず政治は政治家の客間にひきもどされた。一たん解き放たれ

たエネルギーは急速に冷却しつつあるかのように見える。ブルジョアジーの政治的プログラムは挫折し中でも彼らの帝国主義的進出のために不可欠の安保条約改訂交渉が容易に進み得ない状況をつくりだした。彼らの分派争いは激化している。しかし、この期間も資本家階級は寸断もなく資本攻勢を労働者階級に加えつつある。国家権力による抑圧は行なわれている。改良主義者は資本攻勢の闘いを政治カンパニアに代行させにげを打っている。景気循環の光に照らしてみても一層の資本攻勢は不可避であろう。若し労働者階級の断乎とした階級的な統一行動によって、それに反撃を加えず、個々に闘いを断断し放置しておくならば、労働者階級は首切り、賃下げの中で自信を失い意気阻喪し陰惨な結果を招くことであろう。我々は政治的危機は経済的恐慌を基礎として不可避的に発展するであろうと楽観論を述べたことは出来ぬ。必要なのは労働者階級の統一行動を維持し得るさらに革命的指導部である。運動に引きこまれる大衆が多ければ多いほど、その自覚が高まれば高まるほど、その最初のスローガンは控え目なものであっても大衆運動の自信をたかめ、それを前進せしめる断乎たる決意を強めるからである。その闘争の契機は資本の攻勢によってすべての労働者に対して与えられている。

すでに官公労の越年闘争、群馬、高知の勤評闘争、炭労の長期雇用協定をめぐる闘争等、労働者階級の資本の攻勢に対抗する闘いは、革命的指導部の欠如にもかかわらず、激しく燃えあがっている。労働者の多数を獲得する革命的左翼の確立をかちとれ！

(六) 日本労働者階級の指導部

日本労働者階級の指導部の幾つかの潮流が果して真の指導部を代う。それは闘い過ぎたことによってではなく闘い足りないことによつて可能とされる。このような民間左派主流の動向に対しては彼らの中にも下部労働大衆の圧力を反映した批判的勢力が抬頭することは疑いない。国鉄の岩井ラインと炭労や国鉄民同下部との分化の前兆に注目せよ。こうした動向を敏感に反映しながら社会党青年部や向坂によるところの社会党内部の党内闘争が新しい局面に達しているのである。彼らはプロレタリアートのヘゲモニーを強制しながら、そして或る程度労働者大衆の左翼的気分を反映しながらすすんでいる。

革同派も彼らは、総評主流の右翼の方針に反対する潮流を代表している。しかし彼らの中でも高野等に代表される指導部の致命的な欠陥は革命的理論の欠如であり、中共仕込みの「張子の虎」論がふりまわしながら警職法反対闘争の巨大な階級的意義を掌握することが出来ず、民間の戦術的裏切りを非難しながら前もって彼らの裏切りを見抜きそれに対置する方針を提起することが出来ない。彼らは理論的支柱を日共日見的思想に求めており、従って近代のプロレタリアート思想に武装された真の指導部を代表することは出来ない。従って労働者大衆の左翼化にもかかわらず彼らは結局において単なる反対派に止まらざるを得ないであろう。

代々共産党も彼らの裏切りの性格については我々にとつては最早や周知の事実になっている。彼らは警職法反対闘争の中で驚くべきほどの政治的鈍感さと無力さをバクロしたばかりでなく「警職法反対のみに闘争を限定する一部のセクト的動きがある」とのコトバにみられるようにその階級的意義を全く理解せず、相も変わらず安保条約改訂の闘争をくり返すことによつて民間左派の裏切りとその政治的カンパニアへのすりかえに對する最も良き支柱となり下がって

表しうるのかを検討してみよう。そのために警職法反対闘争という平時の数倍にもまさる階級闘争の学校の中でプロレタリアートが彼の本質をいかにして学んだかを見るのが最も教訓的である。

全労止不況の中での資本攻勢に対して全く資本家の手先の姿をあらわしている。総同盟金属の政治生命は絶たれたとはいへ、或る者は法案提出に賛成し、或る者は労働者の余りの怒りの激しさに驚きながらこの反対運動を妨害するための組織者としての役割を果たした。

総評主流の戦略的には対アメリカ帝国主義（基地闘争・内灘）、戦術的には地域人民闘争方式の日和見主義（町ぐるみ闘争）と日共の改良主義的思想をそのまま移植して指導理念としていた高野派に對し、日本ブルジョアジーの急速な復活過程の中で産業別闘争によるプロレタリアートのヘゲモニーを強調し、賃金闘争等対ブルジョアの戦略を中心にするが急速に大企業労働者を獲得するに依りて支配を確立したグループ。しかし彼らは昨年来の下部労働大衆の発展に驚きながら常にその闘争を抑制し、挫折させながら国鉄を敵に売り渡し、日教組の勤評闘争を見送りこの方針の右傾化で平垣を政治的に葬ることに熱中し、あまつさえ全労等の階級協調主義者との癒着さえいとわない。彼らは警職法反対闘争で労働者の怒りに敏感に反応しながらポーズを作ることを選ばないが、下部労働大衆のエネルギーに対して本能的な恐怖心をいだいている。彼らの裏切りの性格は一一・五の戦術指導、六日、七日の動員中止指令にあまずとく示されて示されている。もし革命的指導部が日々その闘争の過程の中で彼らに代り得る闘いの革命的方針の対置による大衆的バクロと多数の獲得に成功せず、資本の攻勢の中で労働者階級が常に彼らの裏切りつづけられ闘いに疲れるならば彼らは急速にその官僚体制の中に労働者をとじてこめてしまうことに成功するのである。

いる。そして幅広論によってプロレタリアートの利益を広範な大衆のそれに解消して、プロレタリアートの解放によって人間を解放するのではなく広範な大衆の一番の解放を夢見る非マルクス主義を振りまわしながら、一方では五日の統一行動に続いて直ちにプロレタリアートの全面的攻勢の組織が必要とされるときに、社共の「統一こそが勝利の鍵」として最後通牒を突きつけるセクトにおかされてくる。彼らの党内の支配は徹底的な官僚主義によって支えられており、それだけに組織の生き生きとした生命は日一日と失われつつある。にもかかわらず、レーニンの弟子を僭称しながら十月の精神に鼓舞された労働大衆を日々ギマンしつづけ、彼らに非プロレタリア的思想を傾注するとの階級的裏切りを犯している。そして学生党内部の動向に対してはただ没理論的なトロツキストのパトウを加えつつその革命的プロレタリアートとの結合を極度に恐れおのっているのである。

(七) 何をなすべきか

以上の点から我々は既存の一切の党に信頼をおかず、革命的左翼の絶対的独立性をかくとくするために働くとの結論をひきだす。階級闘争の利害に先行する仮空の中に存在する組織原則の存在を拒否する。枚叢の団結の神話をすて階級闘争の役に立たない組織は弊履の如く投げ捨てよ！

真実にマルクスの思想を語り、ブルジョアの合法性の枠に制限されずにそれを打破し、議会演説や口先だけの抗議に満足しないで大衆を積極的な行動にひきいれ、あらゆる根本的な民主主義的要求の闘争を拡大し、燃えさせたブルジョアジーに對するプロレタリア

